

## [行動－支援]型の授業観を背景に

[授業報告] 漢字圏読解2 および水産学研究科日本語・日本事情Ⅱ

留学生センター非常勤講師／水産学部非常勤講師 上 迫 和 海

### 1. 学習指導法の類型

本稿は、授業報告である。したがって、実際におこなった活動の記録を主な目的とする。しかしながら、それらがどのような意識や意図のもとでなされたかをご理解いただくために、冒頭、「学習指導法の類型」をごく簡単に記す。

授業を考える一つの軸は、学習者が「わかる」ことを目標とするか、「できる」ことを目標とするかである。前者を「認知」的、後者を「行動」的と名づけてみる。また、もう一つの軸として、教師が授業中に「指導する」ことを重視するか、「支援する」ことを重視するかが挙げられる。前者を「指導」的、後者を「支援」的と呼んでみる。すると、①「認知－指導」型、②「行動－指導」型、③「行動－支援」型、④「認知－支援」型の四つのタイプの授業が存在することになる。

①の代表は、文法訳読法である。学習の内容が教師によって明確な形で示され、学習者はそれを理解し、既有知識の中に取り入れ、定着させることを目指す。②の代表は「プログラム学習」の理論であり、第二言語教育ではオーディオ・リンガル・メソッドがよく知られている。易から難へ、反復練習の積み重ねで「できるようになる」ことを目指す。③としては、後述の「状況的学習論」や、コミュニカティブ・アプローチの授業スタイルが考えられる。課題遂行過程における自発的な言語行動を通じて「できるようになる」よう学習者を導くことが、教師の目標となる。課題達成はあくまでも結果であり、むしろ学習は、その途上の意識的あるいは無意識的なすべてを含んで想定されている。④は、「発見学習」である。ちなみに、海保・柏崎（2002）は、「第二言語の指導法は、まだ開発されていないようである」と記している。

実際の授業では、これらのさまざまな要素が組み合わされて成り立つのが一般的であろう。ただ、本稿における筆者は、可能なかぎり③「行動－支援」型の授業観にしたがってコースを組み立てようとしている。そのことを前提として報告全体をお読みいただくと幸いです。

### 2. 漢字圏読解2

#### 2. 1. コースの概要

コースの目的：レポートや学術論文などの論説文を読むために必要な文法知識、文章構造に関する知識などを学びながら、各自の専門分野の論文を独力で読んでいくための基礎的読解力をつける。

期間：2003年度秋学期（後期）平成15年10月22日～平成16年2月13日

総授業数：26回（週2回×13週）

対象者：日本語レベル「中級」の留学生

受講者：5（性別 男3、女2／在籍資格 修士課程2、短期留学生1、研究生1、家族1／国籍 中国3、タイ1、オーストラリア1／専門 工学1、農学1、法文1、教育1、[家族1]）

使用教科書：「大学・大学院留学生の日本語 ③論文読解編」

（アカデミック・ジャパニーズ研究会編著 アルク 2002）

その他使用教材：「文化中級日本語Ⅱ」（文化外国語専門学校日本語課程 凡人社 1997）

教師作成ハンドアウト

カリキュラム：	水曜	金曜
'03 10/22	第1課①	24 第1課②
	29 第2課①	31 第2課②
11/5	第3課①	7 第3課②
	12 第4課①	14 大学祭
	19 第4課②	21 第5課①
	26 第5課②	28 第6課①
12/3	第6課②	5 第7課①
	10 第7課②	12 第8課①
	17 第8課②	19 第9課①
'04 1/7	冬休み	9 第9課②
	14 第10課	16 第11課
	21 第12課①	23 第12課②
	28 第12課③	30 第12課④
2/4	第13課①	6 第13課②
	11 祝日	13 修了テスト

## 2. 2. 学習者について

「漢字圏」を対象とするクラスであったが、タイおよびオーストラリア国籍の参加者が1名ずついた。オーストラリア人学生は、中国系で移住前に漢字の教育を受けていた。またタイ人学生は、日本語のレベルそのものが総体的に高く、漢字圏の学習者に遜色なく授業を受けることができた。

参加学生は、いずれも動機および能力が高く、授業は極めて意欲的にすすめられた。ただ、すでに研究課題を持っている学生にとっては、日本語の授業より専門に関わる用件が優先するため出席が不安定になりがちだった。また、このレベルになってくると、日本語能力の伸びがにわかには見えにくくなるため、授業の効果がどの程度なのかを実感で知るのはむずかしい。修了証への関心は全体に低く、修了テストを1名のみ受け合格した。

## 2. 3. 授業で心がけたこと

論文を読みこなすためには、大量のテキストを大まかにでも処理していく能力が重要である。し

たがって、語の個々の意味や文法的知識の組み立てなどから理解を図る「ボトムアップ処理」だけではなく、論文のタイトル、文章の構造、文脈などからの「トップダウン処理」を重視しなければならない。また、特に留学生たちは、専門に関わる知識や母語におけるCALP (Cognitive Academic Language Proficiency) [思考及び認知的発達を促す能力] に関しては、もともと高い基盤を有していると考えられる。

そこで、まず第一に、教材を読む際に細かなところにとらわれて遅滞してしまわず、速く読む、そしてとりあえず読み通してみるよう指示した。具体的には、ストップウォッチを使って学習者ごとに要した時間を数値化し、時間への意識を高めた。

ほかに、学習者がすでに持つスキーマを活性化し利用することに重点を置いて、文章理解を図った。教科書の「読む前に」の部分もその意図と解されるが、それ以外に、対教師や学習者相互のインタラクションを多くおこない、既存の知識や経験がテキストの「読解」に投入されるよう心がけた。

その後は、教科書の「内容理解」を利用して先に全体の大まかな理解を図り、「構造」の説明をし、課の後半は、「読むための文法」「言葉の練習」でボトムアップ処理的な知識の拡大をおこなった。さらに、発展的な部分として、教科書のテーマと交錯する内容のテキストを他の教材から抜粋して重ねて読む、ハンドアウトで文法的な説明や語彙を広げたり深めたりする、テーマに関するお互いの意見や知識、経験を交換する、などの活動を随時おこなった。

## 2. 4. 達成度と今後の課題

2回で1課ずつの進行予定は適切で、13週で13課、つまり最後の「総合練習」を除いて教科書全体を通ることができた。各回での時間配分も十分で、全体的に運営しやすいコースとなった。

トップダウン処理の意識や技能を学習者にどの程度定着させられたかに関しては、はっきりとは評価できない。この部分をどう測定し評価するか、現時点では困難である。学生の授業評価を基に考えると、語彙の拡大や文法的な疑問の解消などは、十分にできたようである。

授業のすすめ方について特に気づいたことは、長文を扱う際のトップダウン処理とボトムアップ処理のバランスである。学習者はどうしても、多く後者に片寄りがちなので、前者に関わる練習をもっと工夫・強化する必要があると感じた。具体的な方法論について学び考えるのが今後の課題である。

また、学習者の関心の向き向きで、内容への興味の持ち方が課によって大きく違う。それを完全に予測するのはむずかしく、盛り上がる場合と盛り上がらない場合の両方で授業計画を立てておく必要があると思う。特に、10課以降の「論文を読む」では、理系タイプと文系タイプとで学習内容が大幅に違うので、両方するにしろどちらか一つにするにしろ、学習者の動向をよく考慮しなければならない。全体としては、学生たちが楽しんで授業に参加していた印象がある。その点が、もっともありがたい。

なお、本コースのカリキュラムおよび基本方針は、留学生センター畝田谷桂子先生のご指導に依った。ここに記して謝する次第である。

### 3. 水産学研究科日本語・日本事情Ⅱ

#### 3. 1. はじめに

鹿児島大学水産学部では、単位取得課目として同学部大学院修士課程1年生を対象とする「日本語・日本事情」の授業が開講されている。しかし、留学生センター開設以前に設けられたコースであることもあって、学部および在籍資格を問わず、広く留学生の参加を認めてきた。そこでこの場をお借りして、その一部を紹介させていただく。

また、水産学部の「日本語・日本事情」は「Ⅰ」と「Ⅱ」があり、それぞれ週1回の授業がおこなわれている。ここでは、筆者が担当している「Ⅱ」のみに限って書かせていただくことをご了承いただきたい。

#### 3. 2. コース概要

コースの目的：各自の専門分野についてプレゼンテーションがおこなえるようになること

期間：2003年度（前期・後期）平成15年4月14日～平成16年2月2日

総授業数：30回（週1回×30週）

教室：鹿児島大学水産学部講義棟1階14号教室

参加学生：8（性別 男5、女3／在籍資格 博士課程1、修士課程5、短期留学生1、研究生1  
／国籍 インドネシア2、中国2、ペルー1、ミャンマー1、ドイツ1、タンザニア1／専門 水産6、工学1、教育1）

使用教材：学生各自持参の専門に関する論文、文献

授業補助者：若松明美、永峯望、野角千恵子、国生早苗、久見瀬祥子

#### 3. 3. 「何を学ぶか」について

このコースでは、基本的に「専門日本語」を学習の対象に考えている。日常の平易な会話にとどまらず、留学生が自身の専門に関わる講義やゼミの場面で情報の収集や発表ができること、あるいは日本人仲間との学究生活でより役立つ日本語を習得することが目標である。「専門日本語」については語彙、文法、文体などさまざまなレベルがあり得るが、本コースでは語彙の獲得が中心になっている。

具体的には、各学生が持ち寄った論文や文献を基に、そこから基本度が高いと思われる専門語を各自向けにピックアップし、日本語、母国語、英語を横に並べた語彙リストを作る。また、その語彙リスト作成と並行して、論文を読みすすめていくものである。実はこの場合に、基となる文献の選定が学生自身にとっても困難な面がある。この点について専門分野での指導教官がご協力くださり、文献をご指定いただけたケースもあった。心より感謝申し上げたい。

#### 3. 4. 「どのように学ぶか」と「状況的学習論」について

本コースの運営上の特徴は、二つの点に集約される。

一つは、学外の日本人との接触機会を積極的に持つことである。また、いわゆるプロジェクトワーク的な活動を通して、学習者たちができる限り自主的に、能動的にコースに関わるように仕向けることである。

二つめは、「授業補助者」の起用である。下記引用文中の「日本人を教室の中に呼び込んで」に呼応する部分となる。筆者が主宰する「異文化教育研修所有隣館」で日本語教育に関する学習をしている人々に呼びかけ、参加した期間はまちまちであったものの、結局5名の女性が関わった。これの最も大きなねらいは、参加学生に「学習」をあまり意識させず、一方で日本語母語話者との大量のインターアクションを通じて「第二言語習得」に寄与することにある。同時に、授業補助者が「言語発達促進活動」に注意を払うことも期待した。

なお、以上二つの特徴と次の「3. 5.」に記す具体的な活動の背景として、「状況的学習論」に触れておきたい。とは言っても、筆者自身がくわしく説明したり述べたりできる立場になく、また、理論的な話題に紙幅を割く場でもない。そこで、「状況的学習論」の重要な部分をなす「正統的周辺参加論が示唆する適正な学習状況」を抜粋・列挙することと、教育実践におけるありようをまとめたものの引用とで、大まかなイメージを持っていただくこととする。

- ①学習主体は実践共同体の正式なメンバーになっている。
- ②略
- ③社会的実践と学習は融合していて明確に区別されていない。
- ④直接的な教授がほとんどない。あるいはひじょうに少ない。
- ⑤親方を含めて、特定の「教える人」がいない。あるいは多くの場合徒弟同士の関係性の中で最も多くを学ぶ。
- ⑥知識の獲得や技能の熟達だけでなく、むしろ全人的な変化を引き起こす。
- ⑦、⑧略
- ⑨いわゆる評価がない。 [西口光一 (2002)]

教室の中で特定の知識や技能の獲得を目指して「教え」「学ぶ」という学習経験を「解体」し、内容やテーマをめぐって協同的に学習する文化的実践として、あるいは、教室の外に出て（または、日本人を教室の中に呼び込んで）実際に日本人と関わりを持つ社会的実践として、学びの経験を再編成しようという試みであった。 [西口光一 (1999)]

### 3. 5. 活動内容

本年度のコースでは、主に次の四つの活動をおこなった。

- A 小学六年生を対象とする学生自身の研究についての講義
- B 一般の日本人を対象とする学生自身の研究についてのポスターセッション
- C 一般の日本人を対象とする学生の母語についての簡単な紹介のための授業
- D 専門に関する作文および語彙リストを集めての文集作り

各回の授業では、それぞれの活動に向けての話し合い、連絡・伝達、準備がなされた。

### 3. 5. A. 伊敷台小学校訪問

日時：平成15年7月14日（月）

場所：鹿児島市立伊敷台小学校

参加者および発表内容：コウ クン 「船の抵抗について」

ナン ミヤットソー 「波と消波ブロックについて」

アーマディ 「三枚網について」

補助者：若松明美、永峯望、国生早苗

日程 12：25～13：10 6年生の各教室で交流会（給食を一緒に食べる）

体育館へ移動、準備、留学生の紹介

13：40～14：10 第1回発表会

14：10～14：40 第2回発表会

14：40～15：00 交流会（インドネシアのダンス）

伊敷台小学校訪問は、今年で4年目となる。小学校側では「研究について学ぼう」という小單元として位置づけており、「研究の方法を学ぶとともに、自分の設定した研究の方法、研究の見通しを確認する」とのねらいを示している。

一方、日本語教育の側からのねらいは次のようである。現在の一般的傾向として、留学生が日本語教育を受ける際には「構造シラバス」をもとにした文型積み上げ型の経験が多い。そこでは、学習者という立場すなわち「教わる側」から日本語に接する機会が圧倒的である。そこで、自分が専門としていることを話すことを通じて「教える側」で日本語を使用する経験をさせ、違う部分で日本語運用能力を伸ばすことが、ここでの主な目的となる。また、相手が子供であることで、より平易な話し方が要求されることになる。自分の専門に関わることを「小学6年生の子供にわかるレベルで」話すことは、さらにまた別な部分の言語能力が求められる。

本コースに参加する留学生たちは、本国ではすでに指導的な立場の経験を持つ人たちが多く。したがって小学校における発表の際にも、コンピュータによって準備された資料がプロジェクターで示されたり、実物が巧みに利用されたり、またその態度にも説得力を感じさせ、高いプレゼンテーション能力を見せる場合が多い。本年も、その点は特に実感された。そのような意味でも、「学習者としての留学生」ではなく「教授者としての留学生」を演じさせる意味は大きいと考える。

### 3. 5. B. 大学祭での「留学生研究発表会」

日時：平成15年11月16日（日）

場所：鹿児島大学留学生センター会議室

参加者および発表内容：コウ クン 「船の抵抗について」

イエーガー シズカ 「ドイツの教育制度と教育改革」

アリフ サトリア 「日本の漁業システム」

補助者：久見瀬祥子、国生早苗、野角千恵子、永峯望

日程 10：00 集合、会場設営

11：00～17：30 来場者とのポスターセッション

鹿児島大学の大学祭に来る一般の方を呼び込んで、留学生の専門についての話を聞いてもらったり意見を交換したりする企画である。事前に情報を流しておいたり、当日学内でちらしを配ったりすることで、来場者を募った。

今年は、「日中友好協会学生部」の学生たちと教室を共有して実施した。学生部は、中国文化の紹介を主な目的とし、特に中国茶の無料体験試飲などを企画、双方の活動が人を呼ぶ相乗効果となることを願っての試みであった。その甲斐あってか人の出入りが絶えずあり、参加留学生たちはかなり多くの日本人と会話する時間を持てた。年齢層や性別、職業などの背景も極めて多様な日本人に立ち寄ってもらえたこともよかったと思う。さらに、留学生自身が日本人の友人などを誘い、「メンバーの一員」としての行動や結果を示したこともうれしい出来事であった。結局、50人程度の来場者があった。

言語面での成果としては、自身の専門についての説明を何回も繰り返すうちに慣れからくる向上が見られ、「日本語を話すことが非常に無意識的におこなえるようになった」という学生の感想が得られた。また、相手が大人のため、小学生向けより突っ込んだ内容のやりとりができたことも確認できた。

本来は休日である大学祭期間中にもかかわらず、活動の場を快くお貸しくださり、またご協力くださった留学生センター各位にこの場を借りて御礼申し上げたい。



写真1 ポスターセッション（大学祭にて）

### 3. 5. C. 留学生による多言語教室

日時：平成16年1月12日（月）

場所：鹿児島大学水産学部講義棟1階

参加者および担当言語：ナン ミヤットソー 「ミャンマー語」

アーマディ 「インドネシア語」

イエーガー シズカ 「ドイツ語」

コウ クン 「中国語初級」

白 銀平 「中国語中級」

補助者：久見瀬祥子、国生早苗、野角千恵子

日程 11：00 開講式、クラス分け

11：10～12：10 1限目

12：10～13：00 昼食・交流会

13：00～14：00 2限目

14：00～15：00 3限目

15：00～15：30 全体会（学習項目の確認・発表）

時間割	クラス	1限目	2限目	3限目
	A	中国語初級	ミャンマー語	インドネシア語
	B	中国語中級	インドネシア語	ドイツ語
	C	ミャンマー語	ドイツ語	中国語初級
	D	ドイツ語	中国語中級	ミャンマー語
	E	インドネシア語	中国語初級	中国語中級

受講生 21名

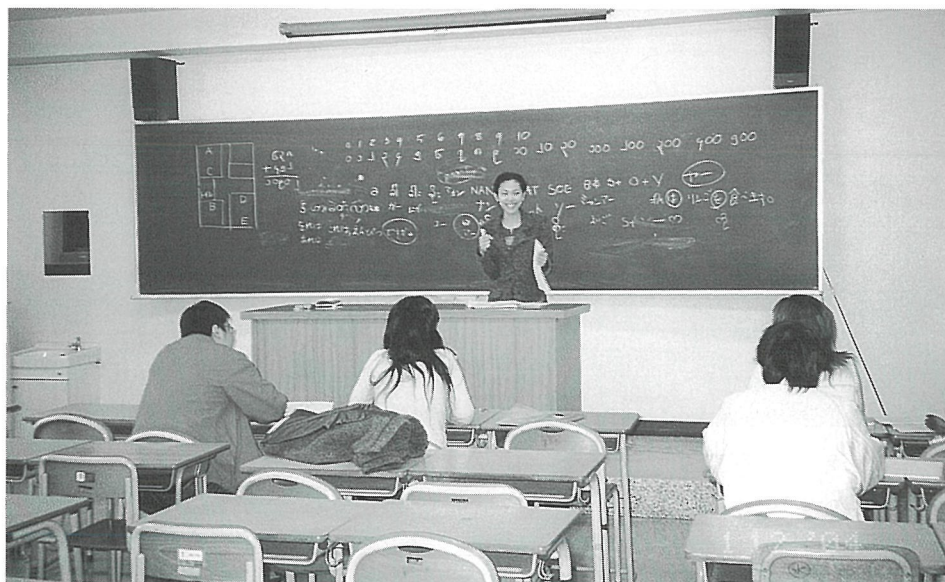


写真2 多言語教室（ミャンマー語のクラス）



この企画は、もともと「日本語合宿」としてあった。日本人20名程度と留学生たちが一泊二日の合宿をおこない、その間まったく日本語だけで過ごす。並行して、留学生による授業や日本語の授業をしてみようというものであった。しかし、まず宿泊地および日程が決まらず、一日だけの活動に切り替えた。さらに、留学生からの意見で自国語を教えてみよう、ということになった。学生の側から出てきた意見であることを重要視した。

また、留学生たちは母国語の話し手ではあっても、外国語として教えたことはない。当然、その両者の間には大きな隔りがある。授業計画をできるだけきちんと準備してもらい、またテストをも考えてもらうことで、安易な雑談に終わらないよう気をつけた。「教える側」の経験や視点を持つことで、日本語学習のありようも再発見してもらうことがねらいとしてあった。

この「多言語教室」は新聞での広報やちらしでの勧誘をおこなった結果、小学生1名を含む21名に参加していただけた。当日は、たいへんなごやかな雰囲気の中、日本人・留学生双方が楽しんで交流できたようである。中国語が初級と中級を準備してありクラス分けの人数配分を心配していたが、中国語既習者の参加が思いのほか多くこの点もうまく運べた。ただ50分を予定していた授業時間は短すぎたようで、時間面での運営が大きくずれ、留学生に準備してもらったテストを実施できなかったのが残念であった。

特に興味深かったことは、受講生の側に留学生の参加があったことである。中国人の留学生がドイツ語とミャンマー語を学んだのだが、このようなタイプのインターアクションもたいへん有益なものに思われた。

### 3. 5. D. 文集作り

完成日時：平成16年2月2日（月）

タイトル：「私の日本語」 総計23頁

参加者および内容：アーマディ 「三枚網について」 6頁

アリフ サトリア 「日本の漁業システム」 2頁

イエーガー シズカ 「ドイツの教育制度と教育改革」 2頁

コウ タン 「船の抵抗について」 7頁

白 銀平 「中国の水産物貿易」 6頁

これまでおこなってきた専門日本語の語彙リスト作りや小学校での発表、大学祭でのポスターセッション、日常の活動を文字情報として残すことを目的とした。形に残すことにより達成感や満足感を提供することがねらいで、1999年度以来、各学期でおこなってきた。本年は、準備された時間が非常に短く、学習者たちにとって消化不良の活動となってしまった。教授者側の反省点である。ただ、できあがった冊子そのものは、装丁・内容ともに例年に劣らないしっかりしたものであった。学習者の能力の高さとともに、それまでの積み重ねの大きさもあったかと思われる。

### 3. 6. まとめ

途中に少し記したように、本コースのような運営の仕方はまだ「一般的」ではない。そこで、いくつかの点について実践者としての感想や反省をつけ加えておきたいと思う。

#### 3. 6. 1. 学習者の反応

まず、一つ一つの活動に対する留学生たちの態度である。最初に示すもっとも多い反応は「おそれ」である。自分の日本語のレベルで提示された活動がなし得るのかという不安が、ごく一般的に見られる。「言語的援助」の中の「学習者を励ます」が教授者にもっとも求められる場面である。しかし実際の成り行きでは、このようなタイプの問題を乗り越えることは、ほとんどの留学生にとって困難なことではない

次の問題として、提示された活動に興味・関心やおもしろみ、価値を見いだせるか、ということがある。いわゆる「動機づけ」に関わることである。経験からすると、学習者が「面倒を感じる」のは自然なことのようにである。しかしこれも、おもしろみの方が想像できるようになると、なんとなくかなってきた。まれに、このような活動の価値を極めて積極的に理解し、自己の技能向上に最大に有効利用しようとする学習者がいて、その場合、実際に日本語の習得も速い。

ところで、本コースのような授業のあり方や教師の態度にもっとも慣れないのは、学習者自身である。たとえば「学習指導法の類型」における「指導」型の授業のみを授業だと思っているタイプの留学生にとって、「状況的学習論」のような方略は捉えどころが無い感じを持ちやすい。感情的な引っ掛かりを少しでも解消するためには、学習者そのものへの理解が必要となる。教師はそのことをできるだけ試み、多くの場合は前進していくわけだが、どうしても受け入れにくい学習者があることも否めない。しかも重要なこととして、そういうタイプの学習者こそ、実は状況的学習の方が有効に機能していると判断される場合が多い。特に教師の力量が問われる部分であり、筆者自身、この部分についてもっと努力しなければならない。

#### 3. 6. 2. 授業補助者の存在

めぐり合わせの幸いもあって、今年度は多くの授業補助者に恵まれた。また、さまざまな活動の中で、それが成り立つために必要な現実的かつ地味な諸作業に対し、たいへん積極的に力を貸してくださった。心より感謝している。

授業補助者は、ボランティア精神とともに、教授者としての技量が求められる。各回の授業においては、学習者と授業補助者との共同作業が頻繁に計画される。その際、日本語に関する質問に答えたり要求に応えたりするための知識や技能をどの程度有しているかが、そのままあらわれる。また、インターアクションを少しでも有効なものにするための視点が大事であり、「言語的援助」を意識的におこなえることが大切である。筆者の側も、授業補助者への指導やアドバイスの仕方がコース全体の成否に大きく関わっていることをあらためて実感した。どのようにすれば向上していけるのかを、より深く考えていかなければならない。

#### 3. 6. 3. コース全体の調和

「正統的周辺参加論が示唆する適正な学習状況」には、「学習が順調に進むように、人や道具など

のリソースが巧みに組織されている」という条項がある。この点について、本コースはまだまだ不十分であると言わざるをえない。週1回という授業時間から考えると、本年度は活動が多すぎて落ち着きを欠いたかもしれない。また、学習者たちの出席が安定しないのも非常にむずかしい要素となっている。

また、平常の授業の中で、コンピュータ教材（『SITUATIONAL FUNCTIONAL JAPANESE』1998 日本情報産業）の利用も並行しておこなった。外に向かったの活動と補完する意味合いで実施したものである。しかし、これが全体の中でどう位置づけられているのか学習者には見えにくかったであろうと思う。

「大学院における日本語の授業」という点を重視すると、本コースのようなタイプの授業が有意義な部分は多いと筆者は考えている。過去の受講生の中には、非漢字圏の日本語未習学習者が、三年足らずで学会発表を日本語でするようになった例もある。論文も要旨だけは日本語で書くに到った。本人の能力の高さや努力による結果であることはもちろんだが、本コースを繰り返し受講したことも、わずかながら貢献していると感じている。どのような活動がどのような価値を持つのか、またどの程度の準備期間・活動を組み合わせるべきなのか、「リソースの巧みな組織化」という大きな目標に向かって考えをすすめていきたい。

#### 引用・参考文献

- (1) 海保博之・柏崎秀子編著（2002）『日本語教育のための心理学』新曜社
- (2) 西郡仁朗・鈴木美加（1992）「日本語の読解過程におけるトップダウン処理に関する実証的研究」『日本語教育学会秋季大会予稿集』日本語教育学会
- (3) 村岡貴子他（2001）「専門日本語教育の現状と将来の方向」『日本語教育学会秋季大会予稿集』日本語教育学会
- (4) 西口光一（2002）「日本語教師のための状況的学習論入門」『ことばと文化を結ぶ日本語教育』凡人社
- (5) 西口光一（1999）「状況的学習論と新しい日本語教育の実践」『日本語教育』100号 日本語教育学会